

## 「21,053 人の子どもの声アンケート」



### 1. アンケートの趣旨

三重県では、「子どもが豊かに育つことができる地域社会」の実現に向けて、地域のさまざまな主体がともに連携して取り組むため、平成 23 年 4 月 1 日に「三重県子ども条例」が施行されました。

この県の動きの中で津市では、すべての命を認め合い、育つ喜びにあふれるまちをつくるため、津市子どもの権利条例づくり推進市民委員会(津の子ネット)が、「津市子どもの権利条例づくり」に取り組んでいます。

子どもの権利には、「生きる権利」「育つ権利」「守られる権利」「参加する権利」があり、それらの権利は、すべての子どもたちにあるものであり、お互いに尊重されるものです。

子どもの権利のことを考えるには、まず、子どもの声(気持ち)を聴くことを大切にしないといけないと考え、アンケートを実施しました。

### 2. アンケートの目的

アンケートを通して、子どもの権利の視点から、

- ① 子どもたちの生活における実感等を把握します。
- ② 子どもたちの権利条例の必要性について明らかにします。
- ③ 市民や行政、関係機関の取組の現場において、子どもの権利について考える機会の創出につなげます。

### 3. アンケートの調査方法

#### (ア) 調査対象

津市内の小学 1 年生～高校 3 年生の年齢(6 歳～18 歳)にある子ども

小学生世代 : 約 15,000 人

中学生世代 : 約 8,800 人

高校生世代 : 約 9,800 人 合計 33,600 人

#### (イ) 調査方法

- ① 学校などを通じて
  - ・市内の小学校、中学校、高等学校において、子どもたちにアンケートの実施をお願いした。
  - ・各学校では、授業や学級会・ホームルームなどの時間を活用して、アンケートの回答を子どもたちにお願いした。
- ② 子育て支援活動などを通じて
  - ・放課後児童クラブ、児童館、各団体の子どもに関わる活動等において、子どもたちにアンケートの実施をお願いした。
- ③ アンケート印刷・配布・回収・入力ボランティア  
平成 24 年 9 月 4 日～11 月 2 日 のべ 286 人、1,922 時間

**(ウ) 回答数 21,053 人**

(小学校低学年 4,530 人、小学校高学年 6,212 人、中学生 6,575 人、高校生 3,728 人、学年不明 8 人)

**(エ) 調査時期 平成 24 年 9 月中頃～10 月末日**

**(オ) 分析方法と結果の利用**

- ① 回答いただいたアンケートデータをパソコンに入力。  
単純集計:協力いただいた学校、グループ等に配付 ※選択肢回答のみ配付  
11 月 4 日(日)の「元気っ津まつり 2012」 ※一部を公表
- ② 有効なクロス集計等を行い、  
子どもの権利条例づくり推進市民委員会の分析チーム(大人)による分析  
※大学の先生のご意見も参考にしました。
- ③ ②の分析結果を盛り込んだ報告書を作成し、報告会を開催します。
- ④ 「子どもの権利条例」制定に向けた取組に反映します。

**(カ) 実施のスケジュール**

平成 24 年

- 9 月 8 日～24 日 アンケート配布
- 9 月 24 日～10 月末 アンケート実施
- 10 月 5 日～15 日 アンケート回収
- 10 月 5 日～11 月 9 日 アンケート入力、単純集計
- 11 月 4 日～ 単純集計、結果報告 (中間報告:元気っ津まつり 11 月 4 日)
- 10 月 29 日～平成 25 年 2 月 8 日 アンケート分析

平成 25 年

- 1 月～2 月 報告書作成
- 3 月 2 日 報告会開催(県庁講堂)

\*\*\*\*\*

《 アンケート協力校紹介 》

養正小学校	高野尾小学校	明小学校	倭小学校	芸濃中学校	白山高等学校
南立誠小学校	西が丘小学校	長野小学校	八ツ山小学校	美里中学校	みえ夢学園高等学校
北立誠小学校	豊が丘小学校	高宮小学校	美杉小学校	東観中学校	高田高等学校
敬和小学校	南が丘小学校	辰水小学校	橋北中学校	香海中学校	日生学園第二高等学校
育生小学校	誠之小学校	草生小学校	東橋内中学校	一志中学校	津市教育支援センター
新町小学校	成美小学校	村主小学校	西橋内中学校	白山中学校	盲学校
藤水小学校	桃園小学校	安濃小学校	橋南中学校	美杉中学校	聾学校
高茶屋小学校	戸木小学校	明合小学校	南郊中学校	三重大学附属中学校	城山特別支援学校
安東小学校	栗葉小学校	香良洲小学校	西郊中学校	高田中学校	〃 草の実分校
楡形小学校	榊原小学校	大井小学校	一身田中学校	津高等学校	緑ヶ丘特別支援学校
雲出小学校	立成小学校	波瀬小学校	豊里中学校	津商業高等学校	稲葉特別支援学校
一身田小学校	上野小学校	川合小学校	南が丘中学校	津東高等学校	フリースクール三重シュール
白塚小学校	黒田小学校	高岡小学校	久居中学校	津工業高等学校	真盛学園
片田小学校	千里ヶ丘小学校	家城小学校	久居西中学校	久居高高等学校	
大里小学校	豊津小学校	大三小学校	朝陽中学校	久居農林高等学校	( 88 校 )



## 【安心して 守られる(いのち・生きる)】

多くの子どもは“自分の気持ちを聴いてくれる人”が周りにいること答えているが、“自分を大切にされていると思う”の回答では半数になっている。

そこで、“自分の気持ちを聴いてくれる人がある”という子どもの自由記述をみると、その内容にペット、インターネット上の友だちなどがあり、一方的に話すだけの相手、裏切らない相手を対象とし、受け止める人がいないことがうかがえる。

また、自分の気持ちを聴いてくれる対象は子どもの多くは家族であったのに、意見や考えを親に尊重されている割合は小学生低学年で半数、中学生、高校生になるにしたがって減少している。

これらの回答から、親との関係性が日常生活に関わる内容を単純に聞いてくれるという行為から気持ちを受け止めて聴く、子どもの成長にあった形で対等な対話へと移行ができず、子どもとの関係性の成熟がないことが考えられる。

一部には、高校生になると話せる人はいるけど本音は言わない、話せる人はいない、聞いてほしいと思わないなど周囲に対して話すことさえあきらめを感じている状況もうかがえる。

## 【自己肯定】

自分に自信のある人は自分のことが好きである。

自分のことが好きであっても自信があるとは限らない。

しかし、自分のことが嫌いな人ほど自信がない傾向が強い。

自分のことが好きと思っている人はまわりから大切にされていると感じている。

逆に、自分のことが好きでないと思っている人は、まわりからも大切にされてないと感じていることが分かった。

年齢が上がるにつれ、自分のことが嫌い、自信がないなどの割合が高くなっていく傾向がある。自信は本来自分を信じる事であるが、子どもたちの多くが考える自信は「○○ができる、できない」ことがものさしとなって自身につなげている。さらに他者からの比較、評価で追い打ちをかけられ、自己肯定感はますます下がっていく傾向にあり、大きな課題である。

## 【育つ】

子どもたちに、人としての成長する場所(機会)が権利として十分保障されていない。

子どもは、人との関係性の中でこそ「育つ」。しかし、このアンケートの中から見えてくるのは、「人との関わりを避けよう」とする子どもたちの姿である。

安心できる場所を「自分の部屋」「ベッドの上」など、他の人を意識しないで済む一人になれる場所をあげる子どもたち。また、意見を言えば友達と対立したり、自分が言ったこと責任を問われるから「目立ちたくない」「どうでもいい」と、自分の意見を主張せずに周りの人の意見にあわせて決まってしまうことを望む子どもたち。そこには、人との関わりの中で折り合いをつけながら生活するといった機会をほとんど持とうとしない子どもがいる。

同時にその背景には「先生や親が勝手にきめる」「すぐに反対される」「ほぼ無視される」など子どもたちに失敗させることを恐れ、正しい答えを常に求め、最短距離で物事を進めようとしている周りの大人達がいる、「よい意見が出せないから」「正しいかどうかわからないから」意見を言わない子どもを生み出している。

大人達は、かつて一見無駄で無意味な時間の中でとても重要でかけがえのない経験をしながら育ってきた。「遊び」の中で仲間と交わり失敗を重ね、傷ついたり傷つけたりしながら育ち、人との豊かな関係の結び方を学んできた。「地域」の中で多くの大人に見守られ怒られ褒められしながら、上下関係や相手との距離感、コミュニケーションのとり方、人のつながりの温かさを学んできた。

今、子どもは、「正しくない」「でたらめな」「参考にならない」かもしれない意見を自由に言う場、自分できめたことで失敗する機会を与えられないことで「育つ権利」が奪われている。

### 【参加】

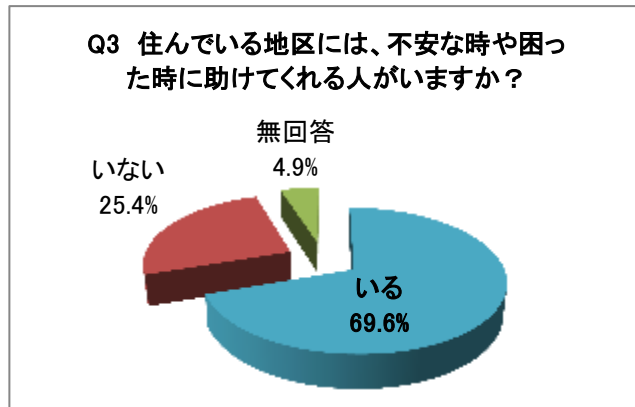
○「参加」は、強制や義務でなく自己決定によるものである。そこで、自分の意見についてのアンケートから考察した。

- ・自分で決めたことや意見を尊重してほしいという回答は、学年が上がるにつれて低下するが、高校生ではやや割合があがる。これは、心身の成長と共に大人との対等感が発達することによるのではないか。
- ・自分の意見が言えないのは、「友だちとの関係性が崩れる」「嫌われるのが怖い」「相手に合わせる」など、言いたいけれど言えない状況に追い込まれていることがうかがわれる。
- ・参加及び自己決定の機会が、親との関係の中で奪われているように思われる。
- ・決めることは詳細なことから大きなことまであるが、「話し合うのがめんどろ」「自分たちで決められない」など、意見を出し合って折り合いをつけていくことを経験する場が少ない(奪われている)。
- ・まちづくりに意見を出すなどの社会参加の場がない。そのような機会もないし、聴こうとされたこともない、大人が勝手に決めているという意見が多い。また、折角意見を言っても、取り上げられなかったり、無視されたりしていると感じているようだ。

○だからこそ、子どもたちにアンケートについての報告をきちんと届けたいと思う。



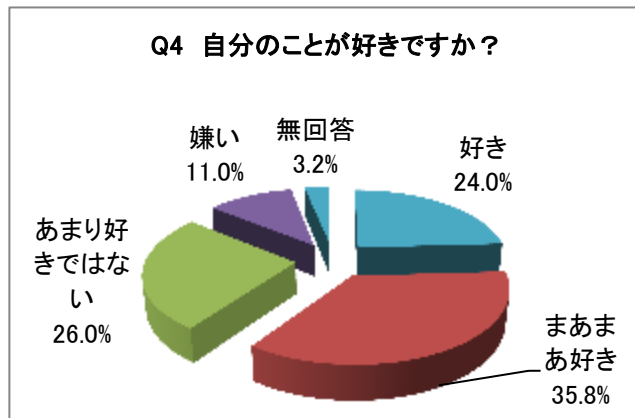
**設問 3** あなたの住んでいる地区には、不安な時や困った時に助けてくれる人がいますか？ それはだれですか？



- ・「いる」は、小学生が約 75%、中学生が 66.6%、高校生は 60.0%であり、うち家族(または、父、母)をあげたのは、小学校低学年で 68.7%、階層があがるにつれ比率は減少している。
- ・家族、親族以外では、「近所の人」を中学生が 17.6%、高校生が 15.9%をあげており、各階層とも「先生」よりも 5 ポイント以上高い。

- ・小学校高学年は、「見守り隊」、「SOSの家」等をあげる子どもが他の階層に比べ多く、中学生は、「地域の人」をあげる子どもが他の階層に比べ多い。
- ・家族、親族との関わりから、成長とともに日常の生活圏が広がり、家族以外の大人との関わりを持つ(社会性を身に着ける過程)を感じる結果となる。
- ・一方で、社会システムとして、子どもを救済する仕組みがないことを認識しなければならない。

**設問 4** あなたは自分の事が好きですか？ それはどうしてですか？

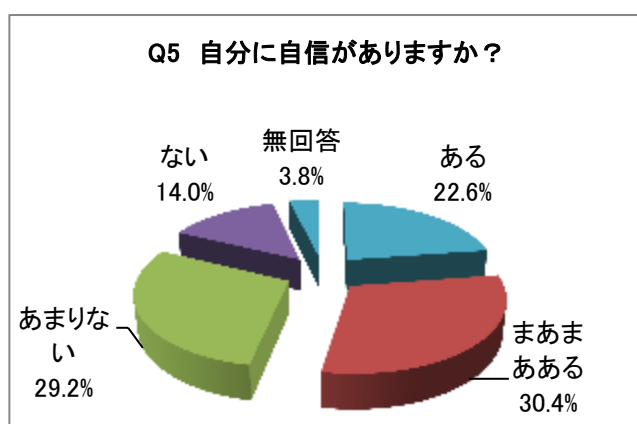


- ・全階層から見ると、「好き」24.0%「まあまあ好き」35.8%を合わせると59.8%となり、約6割の子どもたちが自分を好きであることがわかった。
- ・階層別では、「好き」と「まあまあ好き」と答えた割合を合わせると、小学校低学年 72.7% 小学校高学年 68.0% 中学生 50.4% 高校生 47.2%とその値は年齢が上がるにつれ減少していく。
- ・その理由を自由記述から見えていくと、小学校低学年・小学校高学年の場合、単純に「姉妹あるいは兄弟と比べて〇〇が出来るから、優れているから」と言う記述が多かった。その内容として特技(絵・習字・ピアノ・勉強など)やスポーツ(バレー・バスケット・サッカー・野球・水泳など)などをあげる子どもが多く見受けられた。

- ・中高生になると、比べる対象が友人全般、クラス内と云った具合に広がりを見せ、内容も容姿・性格などをあげる子どもたちが多く見られた。また「好き」に比べ少しあいまいな形の「まあまあ好き」が増える傾向にあった。
- ・「あまり好きでない」「嫌い」と答えた小学校低学年・小学校高学年の割合が 3 割に対し、中高生は 5 割近くとなっている事実にも注目したい。

- ・その理由を自由記述から見えていくと、家族(父母・姉妹・兄弟)や学校の先生から「〇〇がダメ、出来ないと言われるから」と言う回答が多数を占めたのに対し、中学生・高校生については、家族や学校の先生からの指摘等を理由にあげる子どもはほとんどなく、専ら友人と比較して、または、友人関係を振り返り自分自身を見つめてみて「好きじゃない」と答える傾向にあった。
- ・以上の事から、小学生のうちには家族・学校などの幅広く大枠であるのに対し、中学生高校生と年齢が上がるにつれ友人関係など特定の人の関係を重視し、その中で存在感を確認しようとしている姿がうかがえた。(自己肯定感の形成)

### 設問 5 あなたは自分に自信がありますか？ それはどうしてですか？



- ・全階層から見ると「ある」22.6%「まあまあある」30.4%を合わせると 53.0%となり、約 5 割の子どもたちが自分に自信があると答えている。
- ・階層別では、小学校低学年 72.3%、小学校高学年 63.5%、中学生 41.3%、高校生 32.3%と年齢が上がるにつれ減少傾向にある。
- ・その理由を自由記述から見えていくと、小学生については、勉強・スポーツ・学校活動等

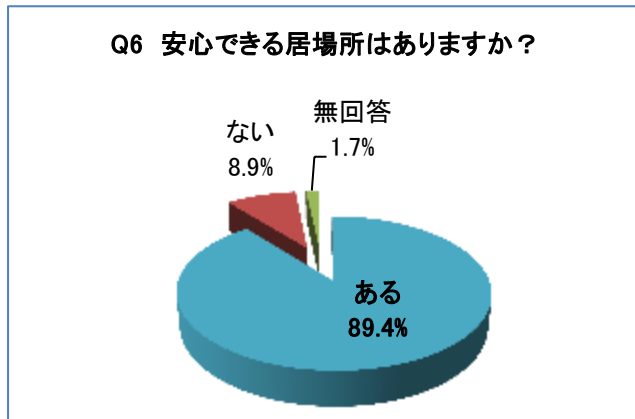
で「出来る」「出来た」「がんばれた」感を見だし、そこで自分の存在感を確認し、自信へとつなげている事が分かった。

- ・中学生や高校生については、容姿・クラブ活動・性格などをその判断基準にあげる子どもたちが多く見受けられた。自信があると答えた子どもたちの多くは「優れているから」であり、自信がないと答えた多くは「劣っているから」であった。
- ・小学生が自分自身の頑張りを素直に評価していること(自己評価)に対し、中学生・高校生と年齢が上がるにつれ友人など周りの人と比べて(他者評価)劣等感を抱く傾向が顕著に見られた。
- ・ネガティブに全てを考えてしまう傾向が強い子どもたちが増えてきていることも分かった。

### 設問 6 あなたには安心できる居場所がありますか？ それは、どこですか？

- ・全階層とも、ほぼ 90%が、居場所があると回答している。場所として、自分の家以外に親戚や友人の家、さらに学校や習い事の場所やお店などがあつた。隔離された「トイレ・部屋・ベッド」等をあげるものと、「人」と共有している場をあげるものと対照的であった。
- ・「一人になれる空間」をあげる回答から、不安や騒ぎから自分を遠ざけ、孤独の中で心の平安を得ようと考えていることがうかがわれる(逃げ場所として確保)。また、年齢が上がるに従い、志を同じくす

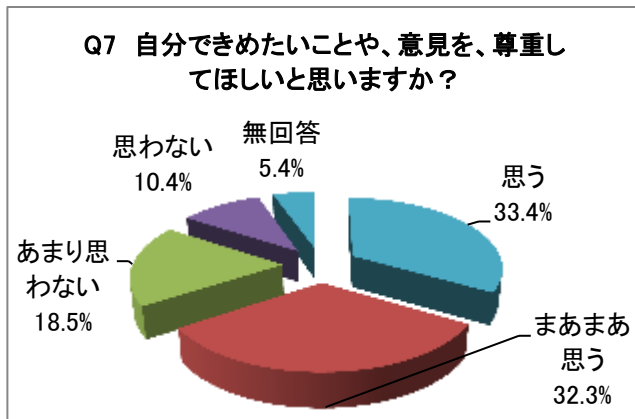




る者の集まりや、逆に「あきらめ」や「強がり」を回答していた。

・「ない」の自由記述にある「家でも学校でも一人だから」「どこにいてもイライラする」「どこも危険」「安心できる場所はなく、友だちを信じたこともありません」「そこに引きこもってしまいそうになる」「常に戦場だと心得ている」等の訴えに心を寄せなければならない。

**設問 7** 自分できめたいことや、意見を、尊重してほしいと思いますか？ それはどんなことですか？



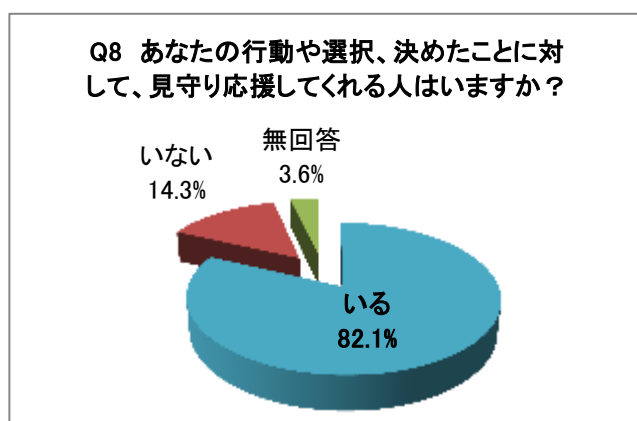
・尊重してほしいと「思う」「まあまあ思う」という肯定的な回答は、小学校低学年で 70. 2%、小学校高学年で 60. 7%、中学生で 62. 6%、高校生で 74. 3%と谷型に推移している。その中ではっきりと「思う」と回答するものは、小学校低学年では 48.6%と全体の半数近くなのが小学校高学年になると 29. 4%と 20 ポイント近く低下し、中学生でも 27. 0%と低下するが高校生になると 32. 9%とまた上昇する。

- ・これは、尊重してほしい対象が子どもたちの中で「親」「家族」から「友達」「学級」「学年」へと子どもの社会が広がっていくことと関係していると思われる。肯定的な答えの中でも「思う」から「まあまあ思う」へ移行するのも、そのことが大きく影響していると考えられる。
- ・そのことは「それはどんなことですか？」という問いに対する記述の中から推察される。小学校低学年では尊重してほしい「意見」が親に対する「買ってほしいもの」や「連れて行ってほしいところ」に関することが多い。年齢が上がるにつれて「学級や学校の決まり」など、集団生活の「話し合い」の場面へと移行し、中学生や高校生になると「進路」が多くなっていく。子どもの発達の中で親や周りの人に対して「要求を聞いて欲しい」から「自分の考えを聞いてほしい」に変化してきているようだ。
- ・なぜ肯定的な回答が低下していくのかという理由は、「あまり思わない」「思わない」という否定的な回答の記述回答の中からも推察できる。「自分の意見を言いたくない」「否定されそうだから」という記述が中学生では多く、自分の意見が周囲から反対(文句や否定と捉えている)されるのが怖いと考えている。また、記述の中に、意見を言うと「自分のせいになるから」「言動の責任をとるのは大変だから」と自分の発言に対して責任を持つことを怖がっている様子も見える。そうしたことから、特に周囲に対しては、主張することを避けたがる中学生の姿がある。周囲に対してアサーティブな関係を構築

するコミュニケーション力が低いため、自分の意見を主張し対立することを避けていることが、「意見を尊重してほしいか」という問いに対して、肯定的な回答が低下していく要因の一つになっている。他者と異なる意見を言うことが、周囲との関係を悪くしてしまうと考えているようだ。

- ・ただ、高校生になって進路選択の時期が近づいてくると、親や先生に決められるのではなく「自分で決めたい」という意志もあらわれ肯定的な回答が増えるようだ。

**設問 8** あなたの行動や選択、決めたことに対して、見守り応援してくれる人はいますか？それは誰ですか？ それはだれですか？

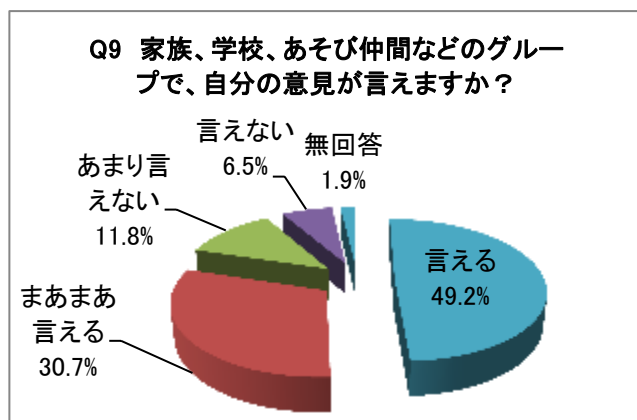


- ・全階層とも約 8 割が応援してくれる人が「いる」と答えている。その応援者として家族（特に母親）をあげている。次に、友だちが多い。
- ・家族以外の大人では、「先生」「習い事の先生・コーチ」「見守り隊」「パトロールの方」等があげられている。
- ・年齢が上がると、ネット上の友だち関係が出てくる。また、そういう場面がなく、想像

して、「きっと・・・」「・・・と思う」「・・・ほしい」という願いも含め、答えている。

- ・小学校低学年では、具体的に「母さんがやるなって」「りょうりとかいそがしい」とこたえている。年齢が上がるに従い、応援されていない不安さやあきらめのようなものを訴え、さらに進むと、「独りでやっている」「いなくてもかってにやってく」と自分の意志で頑張ろうとしていることがうかがえる。

**設問 9** あなたは家族、学校、あそび仲間等グループで、自分の意見が言えますか？ それはなぜですか？

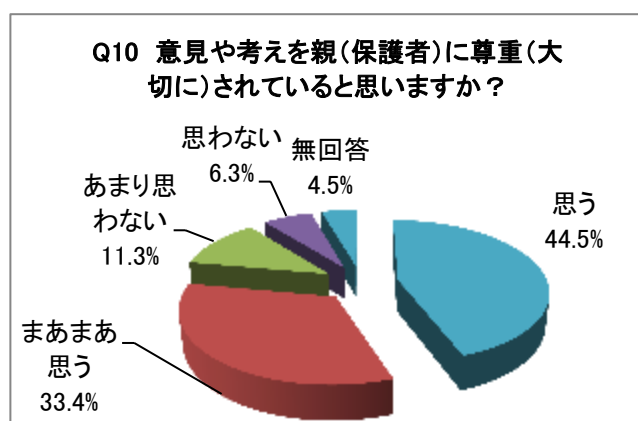


- ・「言える」の階層別の割合では、中学生 53.0%と一番高くなっており、小学校低学年 45.3%、小学校高学年 48.1%、高校生 48.9%となっている。
- ・「言えない」の割合は、小学校低学年 12.8%小学校高学年 5.8%、中学生 4.4%、高校生 3.5%と年齢が上がるにしたがって低下している。
- ・中学生・高校生と年齢が上がっていくにした

がって、言える理由は「信頼関係があるから」「お互い尊重し合っているから」など信頼や相互尊重の関係があり、逆に言えない理由は「友だちやめさせられる気がする」「尊重されることがありえない」「否定されるのが怖い」など相手との関係性が崩れることへの不安感が強いことがうかがえる。

- ・「自分の意見が言えるか」は本人の「自信があるか」よりも言いたいことを言える空気、信頼関係があるかなど相手との関係性が影響している。

**設問 10** あなたの意見や考えを親(保護者)に尊重されていると思いますか？ それはどうしてですか？

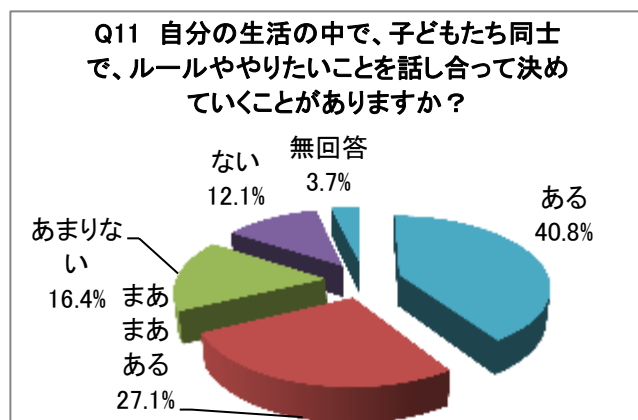


- ・全体的な傾向として、子どもに関わることについての子どもの意見の尊重という点では、親自身が子どもと対等に向き合う姿勢が求められるが、高学年になるとともに好きにさせてくれる意見を取り入れてくれるなどぶつかり合いを放棄する傾向にあり、同時に子ども自身も参画意識が未成熟であるということがうかがわれ、関わり方の対等性が薄いことが見受けられる。

子どもと親が、両方に関わることを、対等に意見を交わし合い相談して自己決定するというプロセスがほとんどないことが推察される。

- ・否定的な意見として、多くは話をきいてくれない、信じてくれないなど、親の忙しさやイライラで子どもを受け止めていない状況や、親の自己中心的な考え方がうかがわれる。

**設問 11** 自分の生活の中で、子どもたち同士で、ルールややりたいことを話し合って決めていくことがありますか？ それはどうしてですか？



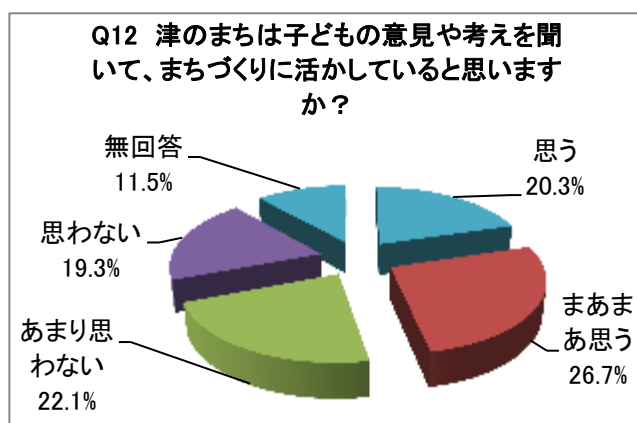
- ・「ある」と答える回答は年齢が上がるにつれて低下していく(小学校低学年 50.9%、小学校高学年 46.3%、中学生 34.9%、高校生 29.5%)。
- ・「ある」「まあまあある」と回答した子どもたちに「それは、どうしてですか？」という自由記述をみると、小学校低学年では、理由も遊びなどの生活の場面で「みんなで決める」ことの大切さをあげていたが、階層が

上がるにつれて「ルールを決めない」と行動を規制するルール作りの比率が高くなっていく。子

子どもたちの発達段階で関わる世界が、周囲からクラス、学年、学校と広がっていく中で、「あそび」から「学級会」「児童会・生徒会」「部活」と社会が広がり、集団生活の中で意見の対立を調整する(折り合いをつける)場面が増えてきていることをあらわしている。

- ・階層が上がるにつれてはっきりと「ある」とする回答が減ってくる理由は、「ない」「あまりない」の理由の記述から読み取れる。「ない」「あまりない」と回答した子どもたちの回答した理由に「わからない」「理由がない」「なんとなく」という回答が1割近くあった。小学校高学年から話し合うことを「なんとなく」避け始め、中学生のときに「なんとなく」話し合わなくなる。中学生から高校生では「暗黙の了解」といった記述が目立つ。話し合うことを避けて、「その場の空気」で決めようとする。話し合いになって「意見」の対立が起こるのを避けようとする意識が現われている。また同時に、話し合いが思うように機能せず、話し合っただけで折り合うことをあきらめてしまっている。
- ・また、「話し合う」という行為の持つ意味が学年によって変化してきているようだ。話し合うことで「みんなの意見が反映される」と信じてきたのが、「話し合うこと」＝「行動を縛ること」という受け取り方に變化し「自由にできないから」「縛られたくない」といった回答が増えてくる。さらに、「なんかみんな自分の意見ばかり」と話し合いで折り合いをつけることの難しさを実感し、「先頭に立つ人がいつも決めてしまう」「大人が勝手に決めてしまう」と話し合われること自体を無意味に感じ、このことから話し合うことが「面倒くさい」と考え、「ある」が低下していく。

**設問 12 津市のまちは子どもの意見や考えを聞いて、まちづくりに活かしていると思いますか？ それはどうしてですか？**



・「思う」は小学校低学年 30.2%、小学校高学年 24.7%、中学生 14.6%、高校生 10.7%と年齢が上がるにつれて低下している。逆に「思わない」は小学校低学年 16.8%、小学校高学年 16.9%、中学生 21.2%、高校生 23.1%と年齢が上がるにつれて割合が高くなっている。

・「思わない」の自由記述を見ると小学生では「聞いてくれない」「こどもの話をあてにしてい

ない」などであったが、中学生、高校生になるにしたがって「聞く機会をもてない」「そっちは子どもの意見を聞いているつもりでもこどもからすればぜんぜん聞いてもらってない」「大人の見解しか尊重されていない」「大体自治体は口先だけで子どもの意見なんかなんとも思っていない」などいかに子どもの意見を聞く機会を持っていないか、大人が勝手に決めていくということへの反論の気持ちがあがってくる。

大人が子どもに真摯に向かい合っただけで対等な気持ちでまちづくりに関して考えてきていないこと、そのような場、機会すら設けてこなかったことを考えさせられた。

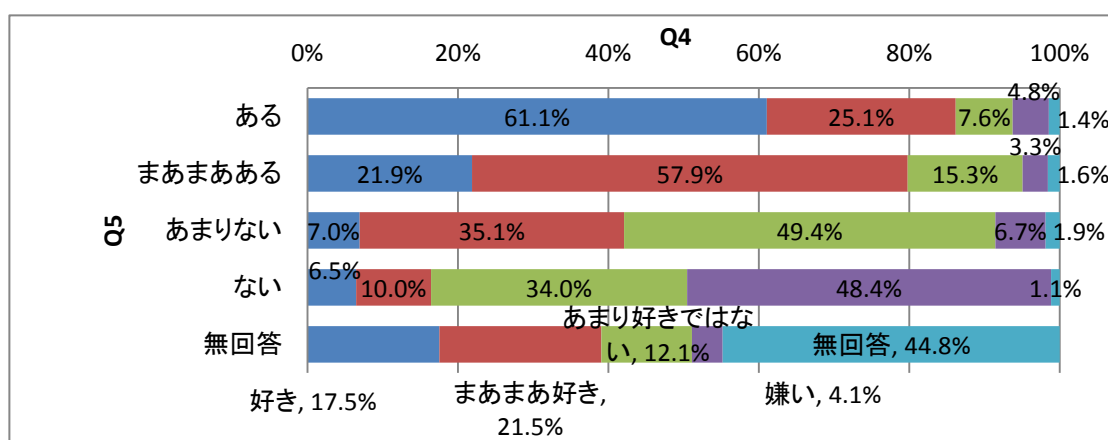


「自分の事は好き」と全体で 65.7%の子どもが「自分の意見が言える」と答えている。その値は、小学校低学年・小学校高学年・中学生・高校生と高くなる傾向にある。高校生では、75.6%と最も高くなっている。

「自分の事が嫌い」と答えた子どもでも、「自分の意見が言える」と答えている子どもは 36.3%ある。子どもたちが意見を言うという状態状況を自由記述から見ると、話し合うということではなく、言い放つ様子が読み取れる。

＜Q5 あなたは自分に自信がありますか？ ×  
Q4 あなたは自分のことが好きですか？のクロス集計＞

自己肯定と自信との関係



・「自分に自信がある」と 61.1%は「自分の事が好き」である。特に高校生でその値が 75.3%と最も顕著である。

・逆に「自分に自信がない」と答えた子どもたちは「自分の事が嫌いである」と 48.4%が答えている。「あまり好きでない」を合わせると 82.4%の子どもたちがやはり「自分に自信がない」と自分の事が好きになれない実態が浮き彫りとなった。

＜Q2 あなたは家族や先生や友達から、自分が大切にされていると思いますか？

× Q1・Q7・Q4 クロス集計＞

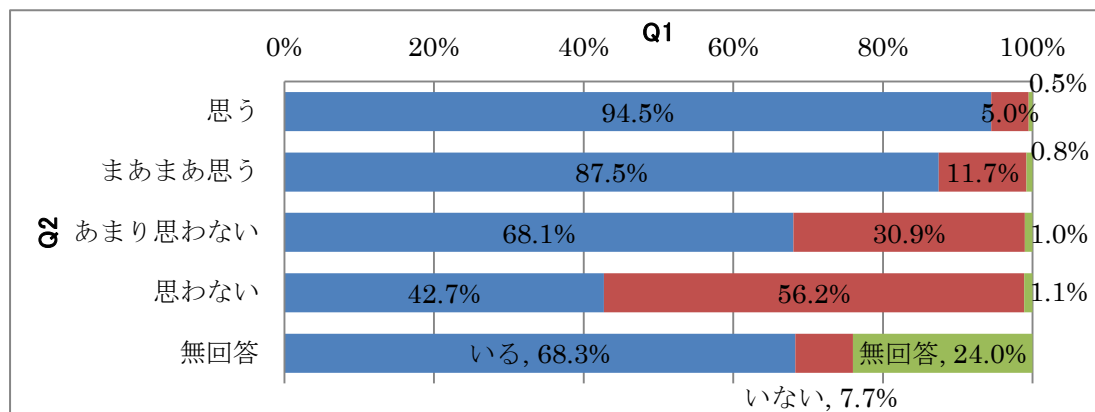
● Q2×Q1 あなたは自分の気持ちを聴いてくれる人がいますか？

他者からの評価と受容との関係

全階層において、「自分を大切にされていると思う」子どもは、「自分の気持ちを聴いてくれる人が周りにいる」ことを示している。逆に、高校生においては顕著に、「自分を大切にされていない」子どもの 7 割が、「自分の気持ちを聴いてくれる人がいない」という結果が出た。あえて言うなら(自由記述も含め)、このように高学年ほど(中学生で一旦下がるが)否定的な側面が強くなることから、単純

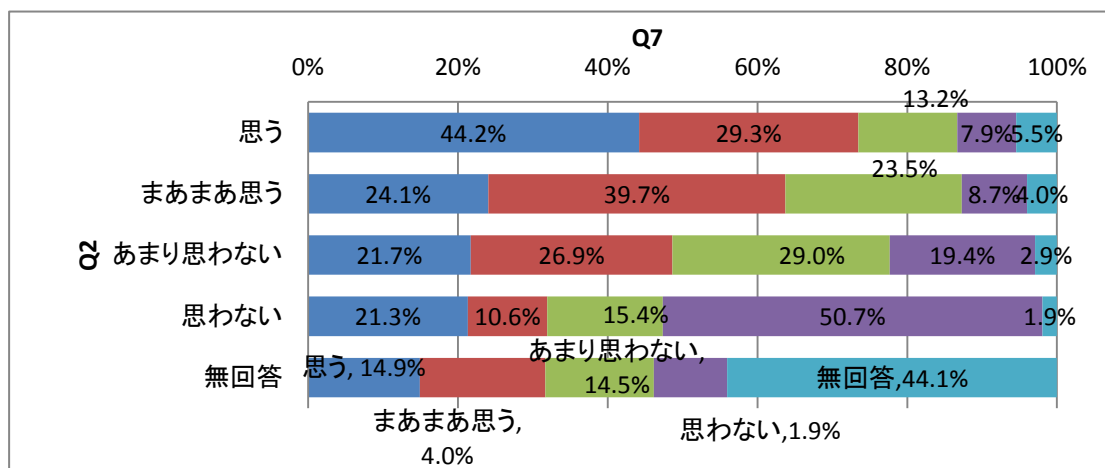


に聞いてくれるという行為から気持ちを受け止めて聴く、そして対等な対話への移行ができていないことがうかがわれる。



● Q2×Q7 自分で決めたいことや意見を尊重してほしいと思いますか？

他者からの評価と意見表明との関係

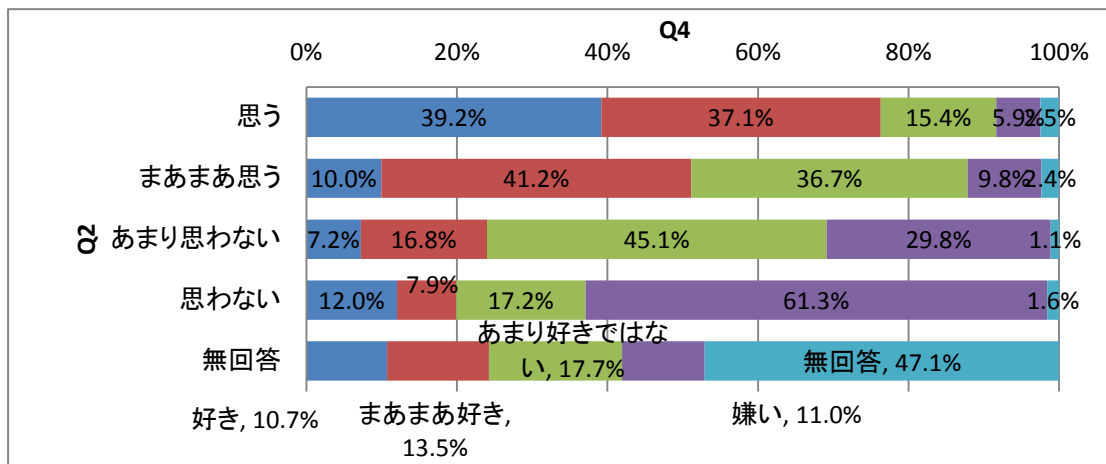


「自分を大切にされている」と感じる気持ちと、「意見を尊重して欲しい」と思う気持ちとは、全体的にある程度関係があると言える。ただ、小学校低学年においては、約6割という高い割合となった。逆に、「大切にされていると思わない」子どもの5割が「意見を尊重して欲しい」と思っていない、あえていえば言う気もないという状態となっているということに注目したい。

● Q2×Q4 あなたは自分のことが好きですか？

他者からの評価と自己評価との関係

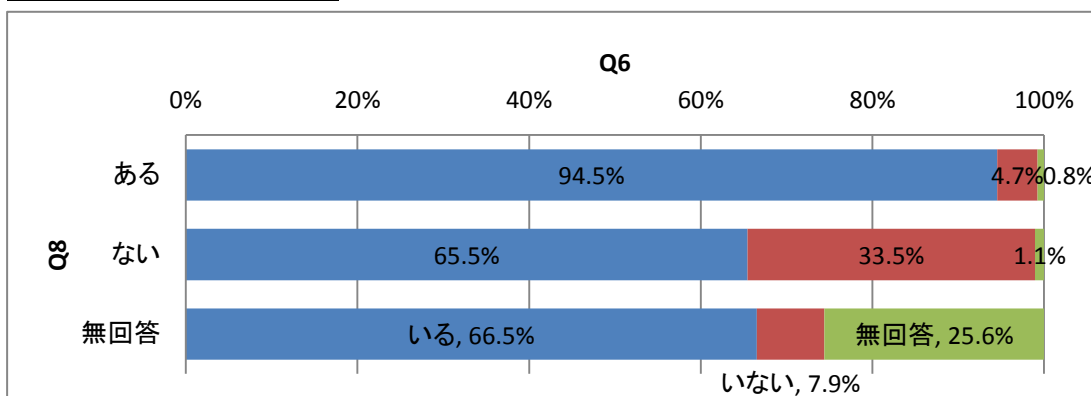
全体として、周りの人から「自分が大切にされている」と思っている子どもは、「自分のことが好きである」ということが、低学年ではある程度は言える。逆に、「大切にされていると思わない」子どもが「自分のことを嫌い」という割合が全階層で5～6割を占めることに注目したい。特に中学生においては、約7割に上る。



<Q6 あなたには安心できる居場所がありますか？ × Q8・Q1 クロス集計>

● Q6 × Q8 あなたの行動や選択、決めたことに対して、見守り応援してくれる人はいますか？

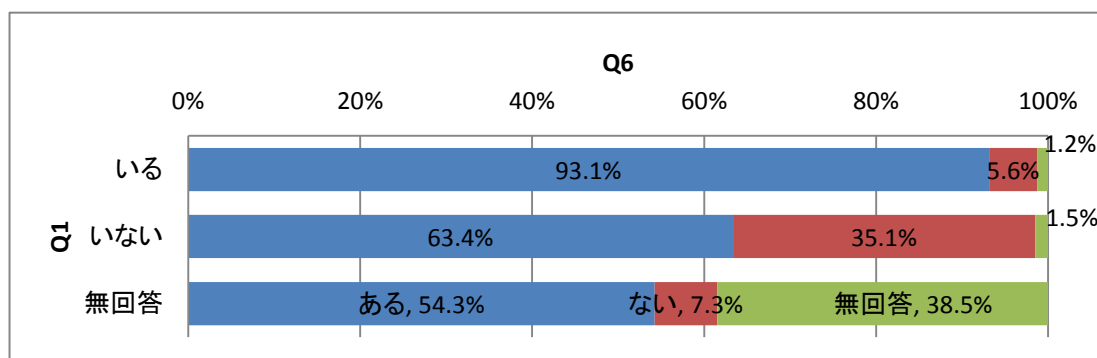
居場所と応援する人の関係



- ・「安心できる居場所がある」子どもは、「応援してくれる人がいる」と多く(94.5%)が答えている。
  - ・「安心できる場所がある」と答えた子どもでも、それが一人になれる(孤立した)場所をあげている子どもにとっては、「安心」と「応援」が結びついていない。
  - ・また、「安心できる場所がない」のに、応援してくれる人がいると答える子どもが各階層とも 56(平均 65.5)%を超えている。これは、子どもたちがとらえている「応援」が、心の問題までふみこんだものでなく、例えば、子どもたちが取り組んでいることに「頑張って！」と声をかけてくれるものを多く含んでいると考えられる。
  - ・安心できる場所もなく、応援してくれる人もいないと回答している子どもたちは、いつどこで日々のストレスを発散し、ホットできているのか？
- 数字では好結果にとらえてしまいそうになるが、安心できる場所が「逃げ場所」だったり、応援してくれる人が「知っている人全部・パトロールの人・ネット上の友だち・いるような気がする・きっといる」という回答では、簡単に判断することは避けなければならない。



● Q1 あなたは自分の気持ちを聴いてくれる人がいますか？ × Q6 居場所クロス  
居場所と気持ちを聴いてくれる人との関係



- ・「気持ちを聴いてくれる人がいる」と答えた子どもは、安心できる場所を確保していると言えるようだ。しかし、気持ちを聴いてくれる人がいなくても、安心できる場所があると答える割合も多い。これは、その「安心する場所」が、一人になるための「逃げ場所」としてのためであり、他者との関わりを断ち孤立を深めるものになるのではないか。
- ・「気持ちを聴いてくれる人もいず、安心できる場所もない」と回答する割合は、年齢が上がるに従い大きくなっている。すぐ近くで生活してきたはずの親・家族・隣人・友だち・学校関係者は、その子どもたちにとって何だったのか。人との関わりが、その子どもに何を経験させてきたのか考えさせられる。